

十五、人間であるということ

「自分は人間である。」幾度も幾度も、そう言って考えてみる、確かに人間である。私は今私人間であるということに対して、一つの限定と、与えられたる自己実現の深さと、その方向とについて考える。この二つのことが明瞭しないことによって、生きることが邪道にそれたり、不退転の歩みが退転したりする。

人間は汽車を考えた。海底にトンネルを造った。電送写真や、やがて電送映写や、その他、科学文明は大変なものを考え出し、今もまた考え出している。今から千年、五千年、一万年の後には、どんなことを成就するかわからない。どんなことでも、成就される。

しかしそこには一つの限界がある。すなわち、飛行機の最上優秀品ができたなら、地球をはなれて、宇宙間の星から星へ飛びまわる。考えられはしても実現はすまい。特に人間が、人形は造り得ても、人間、すなわち生命態としての人間を造り出すことはできない。これは人間に与えられた能力への限定である。

念仏行者になったら、遠隔の地のでき事が、はっきりわかるといったような邪説を信じている者があり、その能力を自己が持っているかのごとく信じている人に出会った。それは、狂信ではあっても、正信ではない。人間としての限界を知らぬ錯覚である。特にそれを念仏に結びつけるがときは邪妄も甚しい。

われわれが食前食後の言葉を拝誦するに對して、二つの方面からの抗議があつた。その一つは、在來の念仏信者の人からであり、一つは念仏のない人からである。

「光明團には、お経？を言うて食事するが、ああまでせんでも極樂へは參れる。あんなことをしておればお汁でも冷えてしまう。」

「自分らは、合掌するどころか、寝そべっておつて食べた方がいい、その心があるのに、あんな言葉を述べて食うのは、偽善的である。」

前者は、功利的な念仏信者の言葉であり、後者は、人間の本能的要求のままに生きるのが、飾りがなく、自然で、窮屈でなく、特にコセコセしてないと考える人である。私たちは食うことについての深い慚愧と感謝を持つ。合掌するくらいは当然すぎると思う。そしてあの食前、食後の言葉を言つたからとて、いつもあのとおり的心ではあり得ない。おいしくなかつたり、品の多少を言つたり、味の濃淡を思つたりする。しかしそれであるがゆえに、野菜の一本でも粗末にしては相すまぬと思う。

私たちは人間であることを知り、人間的生活の存在に對しての反省を持つ。本能的な心意をそのままにすることは、よいことではない。かかる態度が、もつと大きな真理へ對してもなされる時、何ものをも受け取ることなくして人生を終る。ことわつておくが、私たちはそれによつて極樂參りのだしにしようともしないし、また善人になろうとも思わない。ただ合掌して生きることが、人間として當然の相であることを学んだだけである。

親鸞聖人は、内省されたる自己を愚禿と言われた。けつして「我が世に出現する所
以は、一切衆生を済度せんがためなり。」などと高上りしたことは言われなかつた。
これ人間としての限界を、明瞭に信知された言葉である。しかしその愚禿のままに
「信心よろこぶその人を、如来と等しとときたまふ、大信心は仏性なり、仏性すなはち
如来なり。」と讃えられた。これしかしながら人間に与えられた自己実現の深さに覺
められた言葉である。

親鸞聖人は、だれよりもはつきり「正定聚不退の菩薩位」を念仏衆生の現実に肯定
せられた。すなわち人間が念仏に生ききれば、弥勒菩薩と同じき、菩薩最上位に至
り、やがて必ず涅槃に至つて、仏陀となることができる。衆生が仏となる。これほど
深く大きく、人間の上に価値実現を肯定した者はあり得ない。

しかし一面それであるがゆえに、深く人間としての限界を知つていられる。お弟
子に与えられたお手紙の中には、

「われ往生すべければとて為すまじきことをもし、思ふまじきことをも思ひ言ふま
じきことをも言ひなどすることはあるべくも候はず、貪欲の煩惱に狂はされて欲も
おこり、瞋恚の煩惱に狂はされて猜むべくもなき因果をやぶる心もおこり、愚痴の
煩惱にまどはされて思ふまじきことなどもおこるにてこそ候へ。めでたき仏の御
誓ひのあればとてわざと為すまじき事共をもし、思ふまじき事どもをも思ひなどせ
んは、よくよくこの世の厭はしからず、身の悪き事をも知らぬにて候へば、念仏に
志もなく、仏の御誓ひにも志の在しまさぬにて候へば、念仏させたまふとも、そ
の御志にては順次の往生も難くや候ふべからん。」

御懇ろなみ教えである。人間性の何たるかを知らず、悪に大胆なる人への鉄槌で
ある。悪を悪と思わず、毒を毒と知らず、「薬あり、毒を好め」と言うがごときは、人
間性に対する開眼のできていない人であるとともに、価値実現の意のなき人である。
されば

「仏の御名をもきき念仏を申して久しくなりて在しまさん人々は、後世の悪しきこ
とを願ふしるし、この身の悪しきことをば厭ひ捨てんと思召すしるしも候べしとこ
そおぼへ候へ。」

自己を真に知ることとは、そのまま価値の実現に忠実な人である。

聖人はお弟子に説いて言われる。

「師をそしり善知識をかるしめ、同行をもあなづりなんどしあはせたまふ由聞き候
こそ、浅ましく候へ。すでに謗法の人なり、五逆の人なり。なれ睦ぶべからず。浄
土論と申す文には、『かやうの人は、仏法信ずる心のなきよりこの心はおこるなり。』
と候めり。また至誠心のなかには『かやうに悪をこのまんに、慎んで遠ざかれ、
近づくべからず』とこそ説かれて候へ。『善知識同行には親しみ近づけ』とこそ説き
おかれて候へ。」

と聖人は、経釈の教えをひきつつ、次には、

「悪をこのむ人にも近づきなんどすることは、浄土に参りてのち、衆生利益に還りてこそ、さやうの罪人にもしたがひ近づくとは候へ。」

「自分は悪人をこそ救うのだ」などと、悪人に近づくことは危険である。聖人は、悪をこのむ人に近づくようなことは、浄土へ往生して仏になつてからすることであると言われる。ミイラとりがミイラになるの喩え、人間は人間であることを知らねばならぬ。油が自分で油であることを知らずに、火に近づくとは候へ。

人間は縁次第でどんなにもなるものである。昨日信じた人が、今日は信じられず、昨日信じられなかつた人が明日は変つてゐる。縁次第でどんなにでも變つて、その正体がないのが人間である。悪知識や、悪人に近づいてはならないとは考うべき教えである。

されば聖人は、

「年ごろ念仏して往生願ふしるしには、もと悪しかりし、わが心をも思ひかへして、友同朋にも、懇に心のおはしましあはばこそ、世を厭ふしるしにても候はめとこそ覚え候へ。よくよく御心得候ふべし。善知識をおろかに思ひ、師をそしる者をば、謗法の者と申すなり。親をそしる者をば五逆の者と申すなり。同座せざれと候ふなり。」

と、友同朋に親切でなく、善知識や師匠を疎かにしてそしる者、親をそしる五逆の者を嫌つて、同座すなど言われる。

言われるのみならず、自らもまた「されば北の郡に候ひし、善証房は、親を罵り、善信(聖人のこと)をやうやうにそしり候ひしかば、親づき睦じく思ひ候はで近づけず候ひき。」とお弟子さえ悪い人をば遠ざけていられる。

誰とも手をとつて行かねばならぬ。それは人間の根本の願いではある。しかしそのために魂の声をゴマ化したり、妥協したり、引きづられたり、ずるく許したりすることはできない。みなと手をとつて歩まねばならぬ。しかしながら、人間という者の限定された実相を知らねばならない。

仏教では女子のことを「五障三従の女人」と言われてきた。ちよつと考えると、女子を愚劣者のように、ばかめたようにとれるが、そうではない。男子に向かつて、女子を愚劣視せよと説かれた言葉でなく、女子にむかつて、女としての限界、性能、特質、等を知れとの言葉、すなわち女子が女子であることを知れとの言葉である。五障とは、一には梵天王となることを得ず、二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身。以上にはなることができないと言われるのである。梵天王や、帝釈天は、天上界の善神であり王者である。女人は天上界の王者にもなれないかわりに悪魔の王にすらなれない。人間世界の王の中の王、すなわち転輪聖王にもなれないし、釈迦のごとき応化身の仏身にもなれない。つまりすべて王者や頭になれないとのことである。もちろん例外はあることであるが、だいたいそれが事実であると思う。

一流になると料理すら女子ではできない。花でも裁縫でも、学問でも技術でもよいよの所になると女ではできない。

しかしそれは女の恥辱ではないと思う。ただ、女が女であることを知らず、高上りした態度や、己を忘れてはね上ったり、感情のみで動いたりすることがよろしくないのである。そしてまた五障の説は、女子に対して精進努力することをとどめたものではない。女子として生くべきを教えられたものである。仏は人を本質的に生かすことよりほか説かないのだから。

女は情に動くものである。それがわかつていると、良い方面へその情を養われるが、悪く動けば自分ですらもてあましてしまうようになる。いくら思想堅固のようでも根強い力にはいつしか動かされて「あの人が」と思うようなことになる。「自分はよく感情で動くから気をつけないと大変になる」ことを忘れていると、気のついた時には大変なことになっている。

炊事をして、男子のみの家庭だと、飯の炊き方から、火の始末、薪や炭の節約から、何でも徹底的に考えて、そこに自分を生かす。しかし女子は何十年も飯をたいても、その加減が一定せず味をつけても毎度ちがう。ただその場限りの習慣にひきずられるからである。

女が多く集まると、必ず問題が多い。そして男子の仕事の邪魔になりやすい。世の人妻百人中、何人が夫の助けになっているであろうか。居ればただ何人かであり、幾十人かは一生涯夫の重荷となり、可もなく不可もないのが、成績のいい方であろう。

いかなる社会にも家庭にも女が必要である以上、女の動きは、死活の問題になるから、如来は女人正客を説きたもうのではあるまいか。

女よ。正法を聞け。正法の前に合掌して、人間ありのままを本質的に生かしたもう如来に汝を托せ。もし、その胸中に聖なる火の燃えるなく、化粧することだけ、おしゃべりすることだけが一人前以上になった時、女は世の中の癌的存在となるであろう。そして、いかなる教化も忠告も受け入れてゆく火が消えて、フンと鼻であしらっていられるようになった時。

本部では今幹部講習が開かれている。昼は『大乘起信論』であり、夜は行巻である。行巻の講義において、「名聞」または「名声」の問題が出てきて、長い間考えさせられる問題の一つとなった。衆生にあつては、「名聞」を求めることは五欲煩惱の一つに数えられるのに、如来は「我、仏道を成ずるに至らば、名声十方に超えん。究竟して聞ゆる処なくば、誓つて正覚を成ぜじ」と誓われているがゆえである。

「以上の説を考察するに、凡夫は煩惱成就するがゆえに、好名聞を成就すること能わざるものである。すなわち衆生は、必ず名聞を求めて大法すら毀損するものなるがゆえに、名聞を求むること自体が迷妄の相にほかならない。すなわち求めても真実の好名聞ではあり得ない。所詮大地においては成就し得ざるものである。しかし衆生が求めてはならぬものであり、衆生において成就し得ないものであるがゆえに、如来

においては成就されなければならぬものであり、成就されるものである。あたかも、衆生は自利成就しようとしてかえって自損を成就するがゆえに、如来においては、真実自利成就したもうがごときである。すなわち真の意味においては、必ず自利の成就されねばならぬごとく、名聞もまた必ず成就せられなくてはならないのであろう。……如来にあつては成仏道と聞十方の名声の成就とは、必然的關係なるがゆえに……

これは行巻講義のノートの一節である。大地には大地の約束があり、限界があり、実相がある。それを領解することが真に生きる道を発見することである。

仏教に社会性を持たせようとする運動、大衆の中へかつぎ出そうとする運動などがだいぶん盛んになってきたようである。

老人の世界の遺物として滅んでいこうとする仏教を大衆の中に持ち出して、社会の中に生かそうとする運動はなされなくてはならないし、それに対して敬意を表さなくてはならないが、しかし大衆性、社会性をもたすということは、けつして個人の深い歩みをいい加減なところで打ち切つて運動屋になることであつてはならない。

私は『大乘起信論』の講義をして、いまさらに、成仏過程の深さと、人間の闇、無明妄染の底深きにおどろいた。自利成就しきる世界をぬきにして、いい加減なところで、利他行らしく、自損損他の病毒を流して歩くことは恐ろしい。

何よりも何よりも恐るべきは、内心の聖火のかほそく、求道精進の熱意なきことである。またしてもまたしても、内へ内への招喚の声が聞こえなくなつて、外へ外へと向下流転をつづけてゆく相が少しも見えず、欲の幻のみ追うて、今日一日今日一日と消えてゆくことである。

聖火よ燃えよ。

もつともつとはつきり火よ燃えよ。

薪をくべよ。

尊き不滅の法身そのままの信の火よ、

人間の心に燃えよ。

人生の野に燃えよ。

静かな深い歩み、

そは人間にのみ許された道である。

南無阿弥陀仏。